



「質の時代」 ④ 沖縄観光に思うこと

観光統計といえば、年間来訪者数が重要視されがちですが、僕は、沖縄にとって最も重要な統計値は「一人当たりの平均滞在日数とその推移」だと思っています。この指標は、お客様一人ひとりが「もう少し長く滞在したい」と思う気持ち、すなわち観光地の質を集約的に表現するものだと思うからです。そして、あまり知られていないことですが、収入重視の「観光立県」政策によって増加し続ける来訪者数とは裏腹に、沖縄の観光客の平均滞在日数は過去30年間ほぼ一貫して低下し続けています。結果として、「日本語の通じる安価なリゾート」という沖縄の位置づけがほぼ定着してしまっただけがあるわけです。

世の中では質よりも量を優先する事業に溢れ、「専門家」と言えば事業のボリュームと短期的な効率を追求する人ばかりになってしまいました。「高価なホテル」と「質の高いホテル」の違いをはつきり説明できるホテルエを見つけることは至難の業。「高級ホテル」の料理長は、メインディッシュの牛や鶏が何を食べて育てられたかに無関心、年間8000kg搾乳する方法や人工授精には詳しい酪農の

The quality or the volume. That is the question.



専門家が、最高級の牛乳とはどのような環境で生育したどのような牛から取れた生乳をどのように加工したのかを明確には知らないように、農薬使用量や除草剤に強い品種や野菜の相場に詳しい農業のプロは、最高品質のお米や野菜は、どのような考え方に基づいて、どのように栽培したのか、という問いに答えることができないのです。

一方、沖縄の潜在力は相当なもので、移住者数は年間1万人とも2万人とも推定され、本土生活環境の質の低下も相まって、ありのままの沖縄を評価する人がどんどん増えています。観光業界がすべきことは、沖縄の質の高さを見直す、という実はとてもシンプルなことなのかも知れません。

樋口耕太郎 (ひぐち・こうたろう)

岩手県盛岡市出身。
1989年野村證券株式会社入社。2001年株式会社レーサムリサーチ取締役。同社のホテル事業戦略を立案し、2003年グランドオーシャンホテル(元オーシャンビューホテル)、2004年サンマリナーホテルの代表取締役社長に就任。2006年リゾートホテルなど「労働集約的サービス事業」の事業再生を専門とするトリニティ株式会社(www.trinityinc.jp)を沖縄で創業、代表取締役社長。沖縄在住、42歳。